

勢は従業員の負担が増えることを意味するだけでなく、従業員のレイ・オフや解雇にも直結する。このデモは筆者の滞在中三日間朝早くから夜遅くまで続けられていた。我々はアメリカの社会を考える上で、こうした現状や、一般労働者の労働観といったものも検討する必要があるのではないだろうか。

## 5 おわりに アメリカ社会の複雑さ

短期間のフィールド・ワークでアメリカ社会の全貌を語るのは土台無理な話ではある。また、今回見聞できた場所が比較的富裕階層の社会に偏っていたことも考慮する必要はある。既に述べたようにアメリカの社会は弱者や多様な価値観を持つ者に対する配慮が行き届いているように見える。しかしながら、経済的弱者が集中して生活する地区や地方ではどのような実態が見られるかについては今回は調査することができなかった。

ただ、今回の調査の中で、筆者が実感したことは、アメリカ社会は様々な価値観を持つ人々に対応してこなければならなかった社会であるということである。様々な民族が集まって成立してきたアメリカ社会の中で、人種や民族ばかりでなく、多様な価値観を持つ人々にまでその対応の対象は拡大している。しかし、その中でもそれぞれの価値観を持つグループの間にはまだ力関係の差が見られるように思われる。例えば、今回ロス・アンジェルスで訪問した日系アメリカ人博物館は、日系移民の苦難の歴史を偲ぶことのできる素晴らしい施設である。ただ、その他のマイノリティに関していえば、(先住民やアフリカ系などを除いて)同種の施設はどこまで充実していると言えるだろうか。日系人にいわゆるホワイトカラー層が多く、日系人の家族収入の中央値がアメリカの平均値を大きく上回っていることや<sup>6</sup>、日系人の国会議員が選出され、政治的にも社会的にも発言力が強くなっていることなどが、こうした施設の充実を実現させたという一面も否定できないのではないだろうか。

今、アメリカ合衆国は人種・民族・文化だけでなく、価値観の多元主義を模索しつつある。国際化、世界化の進む国際社会の中で、日本でも今後こうした方向性は検討されなければならないし、学校教育の現場においても考慮していかなければならないだろう。様々な価値観を認め合うことの大切さをいかに教材化するかが、今後の課題である。

---

<sup>1</sup> 桜井哲夫『アメリカはなぜ嫌われるのか』筑摩書房，2002，pp.141-144。出典は小田実『何でも見てやろう』河出書房新社，1961

<sup>2</sup> 桜井，前掲書，pp.150-154。出典は江藤淳『アメリカと私』朝日新聞社，1965

<sup>3</sup> 岡田光世『アメリカの家族』岩波書店，2000，pp.144-181。

<sup>4</sup> 岡田，前掲書，pp.100-140。

<sup>5</sup> 朝日新聞社刊。今回の執筆に当たっては1981年に刊行された文庫版を参考にした。

<sup>6</sup> 野村達朗『「民族」で読むアメリカ』講談社，1992，pp.175-178。